

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

1/5



上の句

- 1 秋の田のかりほの庵の苦をあらみ
- 2 春過ぎて夏来にけらし 白妙の
- 3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
- 4 田子の浦にうち出でてみれば 白妙の
- 5 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
- 6 かささぎの渡せる橋におく霜の
- 7 天の原ふりさけ見れば 春日なる
- 8 我が庵は都の辰巳しかぞ住む
- 9 花の色は移りにけりないたづらに
- 10 これやこの行くも帰るも 別れては

下の句

- ・世をうち山と人はいふなり
- ・三笠の山に出でし月かも
- ・長々し夜を独りかも寝む
- ・知るも知らぬも逢坂の関
- ・わが衣手は露にぬれつつ
- ・衣ほすてふ 天の香具山
- ・声聞く時ぞ 秋は悲しき
- ・富士の高嶺に雪は降りつつ
- ・我が身世にふるながめせし間に
- ・白きを見れば夜ぞ更けにける

上の句

- 11 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
- 12 天つ風雲の通ひ路 吹き閉ぢよ
- 13 筑波嶺の峰より落つる 男女川
- 14 陸奥のしのぶもぢずり 誰ゆゑに
- 15 君がため春の野に出でて 若菜摘む
- 16 立ちわかれいなばの山の峰に生ふる
- 17 ちはやぶる 神代も聞かず 龍田川
- 18 住の江の岸に寄る波よるさへや
- 19 難波潟 短き芦の節の間も
- 20 わびぬれば 今はた同じ 難波なる

下の句

- ・乱れそめにし 我ならなくに
- ・恋ぞつもりて 淵となりぬる
- ・唐紅に 水くくるとは
- ・人には告げよ 海人の釣り舟
- ・まつとし聞かば 今帰り来む
- ・をとめの姿しばしとどめむ
- ・みをつくしても 逢はむとぞ思ふ
- ・夢の通ひ路 人目よくらむ
- ・逢はでこの世を 過ぐしてよとや
- ・我が衣手に 雪は降りつつ

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

2/5



上の句

- 21 今来むと いひしばかりに 長月の
- 22 吹くからに 秋の草木の しをるれば
- 23 月見れば ちぎに物こそ 悲しけれ
- 24 このたびは 幣もとりあへず 手向山
- 25 名にし負はば 逢坂山の さねかつら
- 26 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば
- 27 みかの原 わきて流るる いづみ川
- 28 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける
- 29 心あてに 折らばや折らむ 初霜の
- 30 有り明けの つれなく見えし 別れより

下の句

- ・ 人に知られでくるよしもがな
- ・ むべ山風を 嵐といふらむ
- ・ 有り明けの月を 待ち出でつるかな
- ・ 今一度の 行幸待たなむ
- ・ 置きまどはせる 白菊の花
- ・ いつ見きとてか 恋しかるらむ
- ・ 暁ばかり 憂きものはなし
- ・ 人目も草も かれぬと思へば
- ・ 紅葉の 錦神のまにまに
- ・ 我が身一つの 秋にはあらねど

上の句

- 31 朝ぼらけ 有り明けの月と 見るまでに
- 32 山川に 風のかけたる 柵は
- 33 久方の 光のどけき 春の日に
- 34 誰をかも 知る人にせむ 高砂の
- 35 人はいさ 心も知らず ふるさとは
- 36 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを
- 37 白露に 風の吹きしく 秋の野は
- 38 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし
- 39 浅茅生の 小野の篠原 恐れど
- 40 恐れど 色に出でにけり 我が恋は

下の句

- ・ 松も昔の 友ならなくに
- ・ しづ心なく 花の散るらむ
- ・ 物や思ふと 人の問ふまで
- ・ 吉野の里に 降れる白雪
- ・ 人の命の 惜しくもあるかな
- ・ あまりてなどか 人の恋しき
- ・ 貫き止めぬ 玉ぞ散りける
- ・ 花ぞ昔の 香ににほひける
- ・ 雲のいづこに 月宿るらむ
- ・ 流れもあへぬ 紅葉なりけり

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

3/5



上の句

- 41 恋すてふ 我が名はまだき 立ちにけり
- 42 契りきな かたみに袖をしぼりつつ
- 43 逢ひ見ての 後の心に 比ぶれば
- 44 逢ふことの 絶えてしなくは なかなか
- 45 あはれとも いふべき人は 思ほえで
- 46 由良の門を 渡る舟人 かぢを絶え
- 47 八重葎 茂れる宿の さびしきに
- 48 風をいたみ 岩打つ波の おのれのみ
- 49 みかき守 衛士のたく火の 夜は燃え
- 50 君がため 惜しからざりし 命さへ

下の句

- ・ 昔は物を 思はざりけり
- ・ 身のいたづらになりぬべきかな
- ・ 人こそ見えね 秋は来にけり
- ・ ゆくへも知らぬ 恋の道かな
- ・ 長くもがなと 思ひけるかな
- ・ 人知れずこそ 思ひ初めしか
- ・ くだけて物を 思ふ頃かな
- ・ 昼は消えつつ 物をこそ思へ
- ・ 末の松山 波越さじとは
- ・ 人をも身をも 恨みざらまし

上の句

- 51 かくとだに えやはいふきの さしも草
- 52 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら
- 53 嘆きつつ 独り寝る夜の 明くる間は
- 54 忘れじの 行く末までは 難ければ
- 55 滝の音は 絶えて久しくなりぬれど
- 56 あらざらむ この世の外 思ひ出に
- 57 めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に
- 58 有馬山 猪名の 笹原 風吹けば
- 59 やすらばで 寝なましものを さ夜更けて
- 60 大江山 いく野の道の 遠ければ

下の句

- ・ 傾くまでの 月を見しかな
- ・ 今日を限りの 命ともがな
- ・ まだふみも見ず 天の橋立
- ・ 名こそ流れて なほ聞こえけれ
- ・ 雲隠れにし 夜半の月かな
- ・ 今一度の 逢ふこともがな
- ・ いかにか 久しきものとかは知る
- ・ さしも知らじな 燃ゆる思ひを
- ・ いでそよ人を 忘れやはする
- ・ なほ恨めしき 朝ぼらけかな

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

4/5



上の句

- 61 いにしへの奈良の都の八重桜
- 62 夜をこめて鳥の空音ははかるとも
- 63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを
- 64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
- 65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを
- 66 もろともにあはれと思へ山桜
- 67 春の夜の夢ばかりなる手枕に
- 68 心にもあらで憂き世にながらへば
- 69 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は
- 70 さびしさに宿を立ち出でて眺むれば

下の句

- ・ よに逢坂の関は許さじ
- ・ 龍田の川の錦なりけり
- ・ 今日九重に匂ひぬるかな
- ・ 人づてならでいふよしもがな
- ・ あらはれ渡る瀬々の網代木
- ・ いづこも同じ秋の夕暮れ
- ・ 恋しかるべき夜半の月かな
- ・ 花より外に知る人もなし
- ・ 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
- ・ かひなく立たむ名こそ惜しけれ

上の句

- 71 夕されば門田の稲葉おとづれて
- 72 音に聞く高師の浜のあだ波は
- 73 高砂の尾の上の桜咲きにけり
- 74 うかりける人を初瀬の山おろしよ
- 75 契りおきしさせもが露を命にて
- 76 わたの原漕ぎ出でて見れば久方の
- 77 瀬を早み岩にせかるる滝川の
- 78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に
- 79 秋風にたなびく雲の絶え間より
- 80 長からむ心も知らず黒髪の

下の句

- ・ あはれ今年の秋もいぬめり
- ・ 外山の霞たたずもあらなむ
- ・ 乱れてけさは物をこそ思へ
- ・ かけじや袖の濡れもこそすれ
- ・ 幾夜寝覚めぬ須磨の関守
- ・ もれ出づる月の影のさやけさ
- ・ 雲居にまがふ沖つ白波
- ・ 芦のまるやに秋風ぞ吹く
- ・ はげしかれとは祈らぬものを
- ・ われても末にあはむとぞ思ふ

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

5/5



上の句

- 81 ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば
82 思ひわびさても命はあるものを
83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る
84 ながらへば またこの頃や 忍ばれむ
85 夜もすがら 物思ふ頃は 明けやらで
86 嘆けとて 月やは物を 思はする
87 村雨の 露もまだ干ぬ 檜の葉に
88 難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ
89 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば
90 見せばやな 雄島の海人の 袖だにも

下の句

- ・ 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
・ 濡れにぞ濡れし 色は変はらず
・ 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ
・ みをつくしてや 恋ひわたるべき
・ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき
・ ただ有り明けの 月ぞ残れる
・ 閨のひまさへ つれなかりけり
・ かこち顔なる わが涙かな
・ 憂きにたへぬは 涙なりけり
・ 忍ぶることの 弱りもぞする

上の句

- 91 きりぎりす 鳴くや 霜夜の さむしるに
92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の
93 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ
94 み吉野の 山の秋風さ夜更けて
95 おほけなく うき世の民に 覆ふかな
96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
97 来ぬ人を 松帆の浦の 夕凧に
98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは
99 人も惜し 人も恨めし あぢきなく
100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも

下の句

- ・ ふるさと寒く 衣打つなり
・ 海人の小舟の 綱手かなしも
・ 我が立つ袖に 墨染の袖
・ ふりゆくものは 我が身なりけり
・ みそぎぞ夏の しるしなりける
・ 衣かたしき ひとりかも寝む
・ 世を思ふ故に もの思ふ身は
・ 焼くや藻塩の 身もこがれつつ
・ なほあまりある 昔なりけり
・ 人こそ知らね 乾く間もなし